

私は一人っ子で幼い頃から父のアルコールの問題で苦勞していました。ですから、家族や周りに対し幼い頃から極度に緊張して、迷惑をかけてはいけないと思っていました。

そんな中でアルコールとの出会いは中学1年の友達の家で興味本位に、誰よりもたくさん飲めてリラックスしたのを覚えています。そして、そのまま学生時代の飲み方は周りとは楽しくつないでくれました。

ですが、社会人となり地元の福祉施設に勤めて、学生時代に学んだ障がい者への理想を語り、現場で上司の考え方や同僚と意見の食い違いが衝突を生みました。周りに対し我慢が出来ず、アルコールの量や独りで飲んでいる時間も増えて、結果的には職場も何度も変わり離れていきました。

福祉関係の勤め先が変わる中、いつしか父親と同じアルコール依存症者の施設で働いていましたが。その当時の自分は利用者の姿に、父親を重ね飲酒を止めたい気持ちも無く、何よりも感情的な言動に嫌悪感を感じていました。なので、再飲酒などすれば「止める気はあるのか！もう一回入院してこい！自助グループに行かないからだ！」と病気はもちろん人として敬うことが出来ませんでした。

対人援助という職種ながらも、どんどん周りとは自己憐憫や自己嫌悪を繰り返しては酔いだけが思い通りにならない現実を切り離していました。しかし、覚醒すると現実へ引き戻されては、アルコールは全てを忘れるのに更に必要になりました。それを何度も繰り返しては倒れて、脳血栓で危うく麻痺が残りそうにもなりました。それでも、アルコールを止める気持ちもアルコールに問題があるなんて考えもしませんでした。

そんな時間を過ごす中、別れて暮らしていたアルコール依存症の父親は病気が進行して、最期

は食道癌で69歳で亡くなりました。

アルコールで父親が亡くなり、全ての私を取り巻く生きづらさの根幹の父親の呪縛から解放されて、事態は好転するのではないかと願うほど自己中心的にもなっていました。

ですが、問題は何一つ解決も解放もされませんでした。私は何でも良いから、早く楽になりたいくて心療内科や、カウンセリングも通いました。アルコール依存症の家族の集まり、感情問題の自助グループや処方箋の服薬に依存しているのかと薬物依存症のセミナーにも出ましたが、結果は悪くなるばかりでした。

すると考えることはまた一緒に、職場を変えたらとアルコール依存症者の事業所で働く回復者に「仕事を辞めようか」と相談に行きました。でも、本当は仕事を辞めたいという考えよりも、何もかも嫌になり死ぬことばかり考えていました。

そんな姿を見た回復者の方は「AAに行ってはいかがですか」と提案してきました。私自身はアルコールに問題は無いと思っていたので嫌でしたが、他に行く場所も考えることもできなかったのも、行くだけ行ってみるかと言けになっていました。

地元のAAのミーティング会場で仲間は会うなり「初めてか？本人なのか？」と聞いてきました。「私は家族で支援施設で働く職員です」と強く否定をしました。仲間は興味を示さず、好きなところへ座ると良いと無愛想に伝えてきました。直ぐに私は来たことを後悔しました。ミーティングも仲間の話は他人事で、退屈に時間が過ぎるのが長く感じていました。最後に自分に話す順番が来たので、どれだけ自分が辛かったと堰を切ったように話しました。

ミーティングが終わり、一人で帰るタイミングを逃し会場を出ると仲間につかまり「話は聞かせてもらった。あなたはアルコール依存症だね」と妙に自信を持って伝えてきました。「おいおい、人の話をちゃんと聞いていたのか」と思う自分に、仲間は続けて「よかったら、また来てみたら」と言葉を残しました。

仲間と別れた後に本当に腹が立って、コンビニに寄ってロング缶のビールを2，3本流して「二度と行くかよ」と思いましたが。もう他に行く所もなく、アルコール依存症だと認めた訳もなく、ミーティングに行っては、仲間の話に共感を持てず飲んで帰る一ヶ月を過ごしていました。飲めば飲むほどに顎が上がり、まだまだ飲むことは出来ましたが「先ずは飲むことを止めることからしか始まらない」というミーティングで何回も伝える仲間の言葉が頭から離れず、2006年12月6日に私はAAメンバーになりました。

あれからも今日一日、色々な問題が起きます。簡単には解決は出来ないことや絶望的になることもあります。それでも飲まないで生きていれば、時間はかかっても必ず問題は解決すると今日一日もまた信じる自分がいます。